

Song Review 13 #たどり着いたらいつも雨降り

『#たどり着いたらいつも雨降り』（作詞・作曲：吉田拓郎、1972年）を取り上げる。元々は吉田拓郎がアマチュア時代に所属していたGSバンド「ダウNTOWNZ」の曲で『第2回ヤマハ・ライト・ミュージック・コンテスト』に出場した際に演奏していた楽曲を新たに歌詞を付け直したもので、当初のタイトルは「好きになったよ女の娘」だった。（拓郎ラジオ、たどり着いたらいつも雨降り、制作話より）。これをリメイクしてモップスに提供したのが、『#たどり着いたらいつも雨降り』である。1973年に公開された日活映画『濡れた荒野を走れ』では、挿入歌として使用された。聞き比べると、歌は歌詞が重要であると痛感する。

「疲れ果てていることは
誰にも隠せはしないだろう
ところが俺は何のために
こんなに疲れてしまったのか

今日という日がそんなに
大きな一日とは思わないが
それでもやっぱり考えてしまう
あゝこのけだるさは何だ

いつかは何処かへ落ち着こうと
こころの置き場を探すだけ
たどり着いたらいつも雨降り
そんなことの繰り返し

やっとこれで俺の旅も
終わったと思ったら
いつものことではあるけれど
あゝここもやっぱり
土砂降りさ
心の中で傘をさして歩いている
自分が見える

人の言葉が右の耳から
左の耳へと通り過ぎる

それほど頭の中は空っぽに
なっちまっている
今日は何故か穏やかで
知らん顔をしている自分が見える」

「たどりついたらいつも雨降り」というフレーズは、人生の徒労感や理想と現実のギャップを象徴している。雨は「浄化」や「停滞」の象徴でもあり、旅の終着点が安息ではなく再び試練であるという逆説的な構造が、深い共感を呼んだ。

吉田拓郎の歌謡界における位置づけ

1. フォークからロックへの橋渡し

- ・エレキギターやバンドサウンドを導入。
- ・本曲は、個人の孤独や倦怠感をロック的なエネルギーで表現した先駆的作品。
- ・若者文化のリアルな感情を音楽に乗せたことで、ニューミュージックの先駆者となった。

2. 共同体から個人へ

- ・「疲れ果てている」、「心の置き場を探す」といった、共同体的価値観から離れた個人の内面描写が強く表れている。
- ・これは「恋愛」、「家族」、「郷愁」といったテーマとは一線を画すもので、ポスト高度経済成長期の若者の心情を代弁した。

3. ライブ文化の形成

- ・この曲はライブでの演奏にも適していた。
- ・ライブを通じてファンとの直接的な関係性を築いた。

評価：★★★★★